

連載 ヘルマンハーブ物語 第4章

日本ヘルマンハーブ振興会会長・ヘルマンハーブ奏者

ちさと
梶原千沙都さん(54)

日本ヘルマンハーブ振興会

検索

立ち止まって
いられない

ドイツで生まれたバリアフリーの楽器、ヘルマンハーブを日本へ。2004(平成16)年6月にウィーンから帰国した梶原千沙都さん(54)は、すぐにヘルマンハーブ普及事業を立ち上げた。農場主のヘルマン・フェーさんがダウン症のわが子のために考案したヘルマンハーブは、ヨーロッパで誰もが演奏を楽しめる音楽の世界を開いていた。「ヘルマンハーブがあれば人生が変わる人がたくさんいる」。梶原さんは奔走した。

(文 赤坂志乃)

Text by Shino AKASAKA

日本初の普及事業

「こちらでヘルマンハーブを弾かせてもらえませんか」。ドイツから持ち帰ったハーブを抱えて、梶原さんは飛び込みで福祉施設を回った。

事務所は、当時住んでいた大阪府高槻市の自宅の8畳一間。大阪府中小企業支援センターにアドバイザーの派遣を申請した時は、主婦がドイツのプロダクトの販売代理権をもらって会社を作るなんてありえないと思われていたという。

「小さな一間で契約書を見せたら、とても驚かれました」

さまざまな起業家セミナーに通い、ダウン症の組織とコンタクトを取り、寝る間も惜しんで活動する毎日。声がかかれば、老人ホームや障害者施設、病院などの行事でデモンストレーション演奏を行って、ハーブを取り入れてもらえそうなどころを探した。一年間に演奏した回数は60回を超える。

「ヘルマンハーブを福祉の現場に届けたいという思いでいっぱいでした」

シニアの女性に広がり

豎琴のような美しい形。澄んだ音色。専用の楽譜の記号をたどりながら弦を弾



「世界最高のヘルマンハーブ奏者」と呼ばれ、ドイツでも指導者向けに奏法を教える梶原さん(右) = 2010年、ヘルマン・フェー社で(日本ヘルマンハーブ振興会提供)

けば、五線譜がわからなくてもすぐに曲を演奏できる。ヘルマンハーブの可能性に感動して、市職員や落語家らさまざまな人が協力を申し出てくれた。

だが、福祉の分野でヘルマンハーブの活用に予算を割くのは難しく、普及はなかなか進まない。一人でも多くの人に体験してもらおうと、何台ものハーブを抱えて福祉イベントに参加し、ハーブが盗まれたこともあった。

そんななか「ヘルマンハーブを弾きたい」と関心を寄せてくれたのがシニアの女性たちだった。

「どこで習えるのかと問い合わせが相次ぎ、急いで音楽経験のある人でインストラクターとしてヘルマンハーブの教室をやってみたいという人を募りました。今から思うと、一般の方々に認めてもらえるようになったことが、その後福祉の

分野に導入してもらおう足がかりになりました」

価値を守るために

その一方で、梶原さんは教室の難しさに直面していた。ヘルマンハーブには特別なマニュアルはなく、インストラクターは自分が経験のある楽器に準じて思い思いに教えていた。誰でも簡単に弾けるがゆえに、一段下の楽器として扱われかねない面が見えてきたのだ。

「このままでは本物の音色を持つヘルマンハーブが、弾けば鳴るおもちゃの楽器で終わってしまう」

ヘルマンハーブの価値を守るために、2005(平成17)年に日本ヘルマンハーブ協会を創設。翌2006(平成18)年にインストラクター契約を整えて、ヘルマン・フェー・ハーブ・ジャパンを設立した。

この頃、ハーブの輸入から営業、販売、経理までほとんど1人でこなし、顎関節症で口が開かない状態に。疲れはピークに達していた。

「何があっても立ち止まっていられない。起業時代は、自分の進み方も環境も事業のあり方もすべてがアメーバのように動きながら、大きく変わっていく必要がありました」

転機となったのは、代表取締役を夫の彰さんに交代した2007(平成19)年。経営をバトンタッチして音楽部門に専念できるようになり、NHK大阪放送局との共同イベントで初めて講師としてスタジオレッスンを行った。講義を締めくくるNHKハートフルミュージックの舞台にはドイツからヘルマンさん親子が来日。「ヘルマンさんは本当にいた!」と、愛好者たちは大喜びで迎えた。(次号に続く)

コラム

子どもの背中④ Text by Mariko KATO

昨秋、息子が庭に植えたチューリップの花が咲いた。もう球根のことを玉ねぎとは言わない。咲く前から心待ちにして、何度も真っ赤なチューリップの絵を描いて待っていた。早春の朝に一番に咲いたのは、小さな黄色の花だった。それも植えた場所ではない所から芽が出た。きっと以前植えた球根が土の中で静かに成長したのだろう。あれっ?という表情ではあったが、彼は「きれい」とつぶやいて嬉しそうだった。

新しい年度がスタートして最初の大

型連休。春休みに家族で遊んで、また遊ぶのが我が家の行事だったが今年は少し違う。

春休み、息子の異変に気付いたからだ。いつもの大型レジャー施設の近くに宿を取り、遊園地も動物園も水族館も全部楽しめる旅で、何度も息子の笑顔が消えた。歩く姿は老人のよう。元気に飛び跳ねるようにはしゃいでいた可愛い姿はどこへ行ったのか?小学生くらいまでの家族連れの中で、私達親子は完全に浮いていた。ファミリー向けの食堂で

硬直。宿のレストランでも、食べ物が喉を通らない。

ギギーッと椅子を引く音、祖父母が孫を叱る大声。マイクがなくても最大の音量でしゃべる店員の荒っぽい接待。もはやレジャーを楽しむどころではない。そして何より自力でできることを、母親の背丈と変わらなくなった息子がやろうとしない心労が重なり、親自身が戸惑って精神のバランスを崩してしまった。

「障害の受容」は、そう簡単ではない。

ダウン症のある子を持つ地域の親の会を設立して12年。我が子への思いを仲間へ繋げる。共に子どもの力を信じよう。そう思えない時に、親自身の心のバリアと社会環境の壁に突き当たる。凡人が思いもよらないことで心傷つく優しい子らのために、心立て直す新緑の季節だ。



(アナウンサー 加藤万里子)

清の風

新緑号

なぎさのかぜ
 2015年4月27日 (Mon.)
 発行 (株)産経新聞制作

14面 第一生命保険



渡邊光一郎社長

第一生命保険（渡邊光一郎社長）の社史「変革の盾」の著者は、第一生命の『本業そのものが社会貢献』だと言う。その精神が、知的障害者らが働く特例子会社「第一生命チャレンジ」にも脈々と受け継がれている。

2面 日本のリーダー



上野谷加代子さん

3面 ニュースな言葉



つんくみさん

5面 ニュースな数字



村木厚子さん

9面 Fellowship



マザーテレサの新刊本

17面 Get in touch



東ちづるさん

ひとりじゃないよ、が合言葉

桜は散り急ぎ、緑の風が吹き始めた。「1年に5月はただ1度…」と詠ったのはイギリスの詩人、クリスティーナ・ロセッティ（1830 - 1894）。前期ラファエロ派の画家たちのモデルにもなった、美しい女性である。

萌えいつる青葉、若葉は、ロセッティでなくとも、思わず「1年に5月は…」と口ずさみたくなるほどの生命力にあふれている。

新しい季節。私たちの法人にも、18人の仲間がやってきた。20代から50代まで。福祉現場の経験者もいれば、全く初めての人もいる。カーレーサーも、ミュージシャンも。もちろん新卒者もいる。能勢電鉄の山下駅（兵庫県川西市）を降りてバスで約25分。トンネルを9つ越え、能勢町（大阪府豊能郡）に着く。その山すそにある救護施設「三恵園」で、入職式を行った。

「まる3年勤めた今、1番伝えたいことは『ひとりじゃないよ』ということです。入職した時からずっと先輩職員にかけていただいていた言葉ですが、最初は受け入れることができませんでした…でも、今は違います。利用者さんのことも、職員のことも1人にしない。ひとり1人を大切にすることが支援の基本であり、大切なことだと思っています…」

小倉里美さん（25）が「迎える言葉」を述べた。1週間後、1泊を含む研修を終えた18人が集った。

「不安でした。でも小倉さんの言葉に救われました」
表現は違っていたが、多くの新入職員がこんな感想を述べた。1人ではない、18人の同期がいる、仲間がいる…研修を通じて、そう思えたのだという。

でも今後、必ずあちこちから拳骨（難題）が飛んでくる。小倉さんが「ひとりじゃ…」の言葉を当初、受け入れられなかったように、1人で何とかしようと背伸びをしてしまう。そのうち、「ひとりぼっちだ」と、おちこんでしまう。その時、仲間がいることに気付けるかどうか。実は、祝辞で唱歌「野菊」の一節を紹介していた。

♪ 霜が降りてもまけないで 野原や山に群れて咲き…

群れて咲き…が『ひとりじゃないよ』に通じている。悲嘆にくれた時、気高く美しく「群れて咲いている」と、想えるかどうか。ロセッティの冒頭の詩は、こう続く。

5月がどんなに冷たくても
陽が照らないで雨だけでも
風と露と夜と昼が 花をどんどん咲かせます…

群れて咲く花は、決してくじけないのだ。

平田篤州（社会福祉法人理事長）

